

# かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 73 号

平成 4 年 9 月 16 日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課



写真 核磁気共鳴装置 (FT-NMR)

(旭川医科大学医学部附属実験実習機器センター)

教授就任にあたって	留学生寄稿 一旭川医大に向往して一…姜 波健… 8
—リプロダクティブヘルスの向上をめざして— …石川 睦男… 2	研究室紹介……………産婦人科学講座… 9
教授就任にあたって 一自己紹介と雑感一…上口勇次郎… 3	研究室紹介……………歴 史… 9
助教授に就任して……………平山 博史… 4	卒業生の動向……………10
旭川医科大学に入学して	平成 4 年度後期分授業料免除及び
—これから見つけるべきこと—…水上 創… 4	延納・分納について…11
旭川医科大学に入学して……………柏手由里乃… 5	平成 4 年度日本育英会奨学生の募集について…11
第35回東日本医科学生総合体育大会(夏季)… 5	学生教育研究災害傷害保険の加入について…11
第39回北海道地区大学体育大会終る…………… 6	土曜日の業務について(学生課)…12
課外活動短信…………… 6	教官の異動……………12
第18回医大祭終る テーマ「一刻千金」…………… 7	窓 外……………高草木 薫…12
原稿を前にして……………菅 敏郎… 7	



# 教授就任にあたって

—リプロダクティブヘルスの向上をめざして—

産婦人科学講座 石川 睦 男

私は昭和36年、先輩、後輩を含めて同窓生の非常に少ない札幌東高を卒業して北大医学部に入りました。時は正に学生運動華やかなりし時代でして、時代は我々学生が担っているといわんばかりの学生時代でした。医学部においても例外ではなく、インターン闘争といわれる一連の学生運動のピークを迎えた昭和42年に卒業しました。その影響で、私の期は臨床系大学院ボイコット、卒業後1年間の実地修練はインターン自らが作成した自主的なカリキュラムによる研修を行った後、4月に行われた医師国家試験は全員がキャンセルして9月に受験するという、それ以前、それ以降の皆さんとは全く異なる経過を辿って医師になりました。1年間の自主研修後、昭和43年4月北大産婦人科学教室松田正二教授のもとに入局、半年間の大学の研修の後、市立札幌病院に勤務し、1年半の研修を終え大学へ戻りました。この間の臨床経験は私の唯一の大学病院以外での勤務経験であり、現在の私の臨床技術の基礎となっております。外科系医師として必要な麻酔の技術を学ぶべく6ヶ月の麻酔科学の研修を行った後、産婦人科の勤務の傍ら、研究面では、現旭川医科大学長であり、当時北大産婦人科講師の清水哲也先生の指導の下、北大応用電気研究所へ通い学位のため実験に日々を費やしました。そこで直接、御指導いただいたのが現東海大学生理学教授沖野遥先生で、MEやレオロジーのみならず研究者としてのマナーを学びました。大学院生でありませんでしたので、6年がかりの実験の結果昭和51年学位を得ました。学位取得の直後、WHOの研究者としてニューヨークのロックフェラー大学にあるポピュレーションカウンセラーへ留学いたしました。主な研究は、子宮の収縮性ならびにプロスタグランジン産生、放出の性周期変動に関するものでした。この1年3ヶ月の留学生活においての研究成果は勿論ですが、ここで日本を含めた世界各地からの人々の出会いは私にとって大切な宝物であり、その友人達の友好は16年を隔てた今日まで続いております。帰国後、若さ溢れる旭川医科大学へ参りました。丁度1期生が5年生生の頃でございます。当人も少なく物もない、しかし希望だけはみなぎっている教室で、清水教授を頭に全員が1つの家族のように力を合わせてがんばっていたことが懐かしく思い出します。次々と北大からも助っ人が旭川に来られ、大変心強く、頼もしく感じられたのも昨日のこのことです。今やその中堅の先生達は道内の核となる大病院で、医長として教室の若い先生達を指導して下さいておりますことは、有難いことだと思っております。昭和58年に清水教授の御尽力、教室員の協力を得て、再び在外研究者として、ニューヨ

ークのコーネル大学産婦人科に客員助教授として9ヶ月間の研究の機会を与えられ、破水における陣痛発来の手順をプロスタグランジンとの関連で研究して参りました。その後さらに1ヶ月間、前回の留学時代の友人であるユリコルカラ教授のいるヘルシンキ大学産婦人科で客員助教授として腹腔鏡手術などの臨床に従事させていただきました。私は自分自身の体験をふまえ、今後は希望する限り多くの教室員に海外での研究及び生活体験の機会を作りたいと考えております。現在の主な研究は、活性酸素—消去系のリプロダクションにおける役割についてであります。活性酸素は炎症、糖尿病、エイジング、発癌などに関与していることが知られてきていますが、我々は、最近、活性酸素を消去するマンガン、スーパーオキシドディスムターゼが卵巣痛に発現していることを初めて発見しました。さらに、活性酸素が、排卵や黄体形成に重要な働きをしている可能性がわかりかけ、その解明に全力を傾注しているところです。さて、産婦人科医といたしましては、我々の分野がお産と癌という狭い範囲にとらえるのは旧来の産婦人科学だと思っております。最近、WHOはリプロダクティブヘルスの概念を次のように提唱しております。「リプロダクティブヘルスとは単に生殖の過程の疾病や異常がないということだけでなく、生殖過程が生理学的ならびに社会的に完全に幸福な状態を達成されることにある。女性が妊娠を経過し安全に出産し、幼児が生存し、健康に成長することを意味する。すなわち人々が妊孕を健康を損なうことなく調節でき、安全にsexを持つことができることを意味する。」現在、世界では1日100万件の妊娠があるがその50%は計画的でなく、25%は望まない妊娠であり、1日15万件の人工妊娠中絶により500名の女性が死亡、また1日1,500名の分娩による母体死亡と1日2万5千人の乳児死亡があるといわれております。受精調節はただ出生を防ぐということだけでなく、女性と小児の生命を守るためにもその進歩と普及は急務です。また、毎日40万件の性感染症が発症し、さらにAIDSの急増と考え合わせると、安全に性を享受するための臨床医学の進歩に努力しなくてはならないと考えております。不妊症は10組1組といわれていますが、体外受精移植に加え、配偶子操作の技術改新を目指さなければなりません。女性の更年期、次第に長くなる老年期におけるクオリティーオブライフの改善への配慮も今後要求されてきます。以上、我々の扱う極めて広い範囲のリプロダクティブヘルスの向上のため、臨床、研究面での試行錯誤をくり返して行きたいと考えております。



# 教授就任にあたって

—自己紹介と雑感—

生物学 上口 勇次郎

本年3月に定年退官された初代教授、美甘和哉先生の後任として5月16日付けで一般教育生物学科教授に就任いたしました。美甘先生の築いてこられた研究と教育の伝統を受け継ぎ、さらに発展させるように、全力を尽くして任に当たりたいと思っております。

簡単に自己紹介しますと、私は昭和19年に青森県に生まれ、弘前大学文理学部を経て北海道大学大学院理学研究科動物学専攻に進学しました。博士課程在学中に、折しも全国を吹き荒れた大学紛争に巻き込まれ、研究室のある建物を一年以上も封鎖され、長期観察中の動物を死滅させられるという憂き目を見ましたが、博士課程終了後も日本学術振興会の奨励研究員として研究を続け、昭和49年3月に博士号を取得しました。同年4月に本学の生物学科教務職員として採用され、以後、助手、講師、助教授を経て現在に至るまでの18年間、本学で研究と教育に当たってきました。この間、昭和57年にハワイ大学（米国）、平成元年にウルム大学（ドイツ）と2回にわたって海外でも研究を行いました。

研究面では、大学時代の卒論“プラナリアの学習の発生遺伝学的研究”が私の研究の皮切りで、大学院時代には“甲殻類の脱皮現象”について研究を行い、学位論文は“スジエビの脱皮周期とその内分泌調節機構に関する研究”でした。本学に移ってからは、美甘先生の指導の下で“哺乳動物の卵母細胞・初期卵割胚を用いた染色体異常の生成原因、生成機序の研究”というテーマに転換しました。最初はラット、チャイニーズハムスターを用いて成功率・信頼度の高い卵子染色体標本作製技術を開発するのに苦心しましたが、これが完成してからは染色体異常の原因に関する新しい知見（卵子の加齢と染色体異常、卵子染色体に及ぼす放射線や化学物質の影響など）が次々と生物学教室から発表されるようになりました。これらの研究に加えて、最近ではハムスター卵との異種間体外受精法を応用したヒト精子の染色体研究や、本学産婦人科学教室との共同研究によるヒト未受精卵の染色体研究を行い、染色体異常の生じるメカニズムを直接ヒトの生殖細胞で解析中です。卵子・精子の染色体研究は技術的にもかなり難しく、世界でもまだ僅かしかデータが得られていませんので、今後もこれらの課題を生物学教室の中心に据えてじっくり研究に取り組んで行きたいと思っています。また、これら最新の研究成果を講義の中にも取り入れ、医科大学の生物学科にふさわしい、生物学と医学を密着させた講義内容を作り上げるよう努力

を重ねています。

講義の事で思い出しましたが、最近、生物学の講義をしていて教育制度についてちょっとしたアナロジーをしました。生物の繁殖戦略には二つのタイプがあります。一つは子供（卵）を沢山産む事に多くのエネルギーを使い、生まれた子供の世話はしないというR-戦略（多産多死）の生物（魚など）です。今一つは産む子供の数を出来るだけ減らし、その分のエネルギーを子供の保護、育児に振り向けるというK-戦略（少産少死）の生物（哺乳類など）です。入学者は大勢だが、卒業して医師になれるのはほんの少しという欧米の医学校はR-戦略型で、医師にならなかった入学者に向けられた教育のエネルギーは回収されません。一方、日本の国立医大では入学者の枠は狭いが、多くの学生が無事卒業して医師になるのでK-戦略型といえます。多数の人間が限りあるエネルギー資源を分け合って共存して行くこれからの社会を考えれば、日本のK-戦略型教育制度の方がより適しているように思われます。しかし、今の日本の大学教育で問題なのは、教師が大勢の学生の前で一方向的に講義するというマスプロ教育で、本来これは子育てにエネルギーをかけないR-戦略のやり方です（どんどん落第させるのならすじは通りますが）。K-戦略生物が子育てに費やすあの涙ぐましい努力に匹敵するだけの教育エネルギー（大幅な教官数拡大による綿密な指導など）が日本のK-戦略型大学教育に投入されていてしかるべきと思いますが如何でしょうか。その他に、単一栽培の農作物が病気に弱く、沢山の農薬を必要とするという事も医学生さんの“単一栽培”をしている我が単科大学にとって示唆的ですが、紙面の都合で詳述できないのが残念です。

先任の美甘先生は退官に当たって、広報誌「かぐらおか」第71号に“創業と守成といずれが難きか”と題した一文を寄せて、大学の守成の難しさを説かれました。二代目の私はまさにこの守成の時代に入った訳です。囲碁・将棋でも多くのスポーツでもそうですが、“守成”を意識すれば往往にして気分は“守勢”になり、何時しか創業で築き上げた物をも失いかねません。私は、先代から引き継いだものを土台にして新たに第二の創業を行うという攻めの（積極的）姿勢でこれからの守成に当たりたいと思っております。

今後ともどうぞよろしく願いたします。

## 助教授に就任して

■ 公衆衛生学講座 ■

平山 博史



氏名、平山博史、S55年北海道大学医学部卒、学生時代から工学技術や工学的手法、理論の医学への応用に興味がありましたので、卒業後直ちに神経生理学教室（加藤正道教授）に入局しました。大

学院では加藤教授のメインテーマである歩行運動の四肢間協調に関する神経生理学的機構の解析を御指導いただきました。同大学院中には同時にいろいろな工学理論を学びました。大学院卒後は、北大医学部の循環器内科で安田教授の御指導をいただき、循環力学とくに心臓血管内の流体力学的研究を行ないました。基礎の講座とは異なり、幅広く生体工学を見通せました。この時期には、機械学会、制御学会、電子情報通信学会、生体工学学会にも入会し、それぞれの学会で理論的研究を発表しました。

平成2年8月に室蘭工業大学小野功一教授（北大40期）の御推薦をいただき同大保健センター助教授として転勤



しました。室工大では機械学科、電子学科、応用化学科、情報工学科と広く諸先生方の御指導をいただきました。また、工学技術の進歩が日本を先進国ならしめたとも認識するようになりました。

平成4年2月から実家の都合により福山裕三教授の御好意によって本学公衆衛生学講座へ転勤となりました。

未熟なものですが、今後とも宜しく御指導をおわがい申し上げます。

## 旭川医科大学に入学して —これから見つけるべきこと—

第一学年 水上 創

飛行機と列車を乗り継いで、朝に金沢を出て旭川に着くのは夕方になる。この行程を何度か辿って旭川医大の学生になった。入試の時列車の外は雪が降っていた。人間の頭脳に現れるイメージは極めてビジュアルなものだと常々考えていたのだが、大陸的な風景に絶え間なく降る雪が後方に流れてゆく様子にふとショパンの「革命」の旋律が頭に浮かんだ。

入学以来の4ヶ月は瞬間に過ぎ去ってしまったように感じられる。それどころか、自分が北海道にいることや、大学生であるという意識さえあまりないような気がする。あらゆる事象が私の眼前を私が認識するよりも先に通り過ぎていった。私の視点は何か鳥瞰的になり、自分の存在が希薄になってゆくような錯覚すら覚える。

大学を一度出て働いていたという人に言われたことがある。「周りの学生を見て失望しないか」と。彼が昔学生であった頃、学生の間いくつか必読の書が存在し、…本はいつでも存在しているが…、みんなそれを読み意見を闘わせていたものだ、現代の学生は自分が何も知らないことを恥じない、という内容であった。かつて必読であったものが現在も必読か、また、現在の（そしてかつての）すべての大学生に理解されるものかはわからない。

世の中の専門化、細分化が進み、医学も専門化、細分

化が進んでいるようだ。医学に限らず自分の専門のフィールド以外について知らないことがあるのは当然のことであろう。自らが無知であることを恥じぬのは自分が無知と感じないからではないか。何かを学ぶということは無知を受け入れること、自分が知らないことがあると認め、無から向上しようとするのではないかと思う。

国立大医学部の学生に国は大きな期待とお金をかけている。みなさんは将来の立派な医師をめざして下さい。ということも諸先生方から伺った。何を以て立派な医師というか。全体の1割を越える集団はもはや小数ではなく大衆であるという話を聞いたことがある。3人に1人が大学へ進学する時代にあっては大学生はもはやかつての社会のエリートではないのかも知れない。少なくとも数多くの医学部がある中で、医学生も特別な存在ではない。必要とされるのが自分ではなく、自分の役割を果たせる存在であるなら、自分の個としての存在意義が薄れてくるようで少し哀しい。

自分が医学部に入って何に向いているのか、基礎か、臨床か、まして何を研究したいか、何科になるのか、などは漠然と考えてはいても、まだリアルな像を結ぶまでには至らない。これからの6年間(?)で自分が邁進してゆけること、その指針も見つけることができるなら幸いですと思う。

## 旭川医科大学に入学して

第一学年 柏手由里乃

いつの頃だったか、それすらも思い出せないほど昔、医師になるという夢を持ち、今やっと、その為のスタートラインに立つことが出来た（まあ、医大生が必ず医師になれるという保証は無いが）。思い出せば2年前、スイスでの高校生活最後の年のあの究極の選択で、もしも異った答えを出していたら、きっと一生後悔していただろう。みなさんも知っての通り海外の学校は日本と違って入学するより進級、卒業のほうが数倍も大変なのである。なぜなら大学入学の為の直接的な試験が無く、そのかわり在学中に出来るだけ多くのテスト（OレベルとかAレベルなど）を取っておかなければならないのだ。もっと簡単に言うと、卒業までの成績レベルで行かれる大学が決まってしまうのだ。私も例外でなく、やっとの思いで高校を卒業し、そのままいけばアメリカの大学へ無理なく行かれるはずだった。なのに、何を思ったか私は卒業式直後に帰国し、予備校に通いだした。もちろんその間の不安は、とても表現できないほど大きなものだった。もしも受からなかったら日本には入れないし、今さらアメリカの大学に入る事も難しかった。そしてなにより、なぜ好き好んで苦勞して卒業した後すぐに又、日本の受験地獄に嵌まらなければならなかったのか。た

った半年の勉強でどこまで出来るのか。はっきり言って賭け以外の何物でも無かった。

入学してから4ヶ月が過ぎた今、学校にも、旭川という土地にもだいたい慣れてきた。だが慣れてきたといっても、まだまだ見る物、聞く事すべてが、うれしく、楽しく、刺激的な毎日です。日本全国から集まった友人達、先輩方の助け（特にテスト前）、宿題やテストなどという形で、我々をほどよく刺激してくれる先生方の愛（うわあ。幸せすぎて涙が出そう）に包まれて、これからの長い（願わくば）6年間、がんばりたいと思う。

あんなに苦しい思いをしてまで望んだ事は何だったのか。私としては、ただ綿密な検査と的確な薬品のみで、病気を治療するのではなく、人間を治すのだという事を常に忘れない医師になりたいと思う。そして、これに一步近づくためには、とりあえず目前に迫った前期試験を、やっつけてしまわないと…(返討ちにあたりして)。まあ、どんなに偉そうな事を羅列しても、これから先どうなるかなんて、実際にその時にならないと分からない。ただ、いつも何かをしようとしている自分でありたいと思う。何もしないで後悔したり、納得のいかない人生なんていやだ。そんなワケで今年の一年一同、自分で言うのも変だけれど、なかなかの兵（どの分野でかが問題だが）揃い。とりあえずは、乞う御期待！

## 第35回東日本医科学生 総合体育大会（夏季）

第35回東日本医科学生総合体育大会（夏季大会）が、昭和大学医学部の主管で、東京都及び周辺各県を会場に7月19日(日)～8月9日(日)まで、35校が参加し各競技が行われた。

本学からは男女併せて25競技に約330名が参加し、日頃の練習成果を遺憾なく発揮した。

成績は次のとおりです。

(学生課)

種目	成	績
陸上競技	男 個人	400m 3位 加藤（6年）
	男 個人	800m 優勝 市村（5年）
	男 個人	800m 8位 加藤（6年）
	男 個人	1500m 5位 市村（5年）
硬式庭球	男 団体	4位
ゴルフ	男 団体	優勝
卓球	男 団体	7位
	女 団体	ベスト8
	女 個人	ベスト8 馬場（5年）
	女 個人	ベスト16 菊地（5年）

バレーボール	男	3位
バスケットボール	女	優勝
柔道	団体	ベスト16
	個人	ベスト8 水上（1年）
剣道	男 個人	3位 田辺（5年）
	女 個人	優勝 森（4年）
弓道	団体	2位
水泳	男 個人	100m 背泳ぎ 7位 鈴木（4年）
	女 個人	50m 平泳ぎ 2位 神藤（4年）
	女 個人	100m 平泳ぎ 2位 神藤（4年）
	女 個人	50m バタフライ 6位 由良（3年）
	女 個人	200m 個人メドレー 6位 由良（3年）
バドミントン	個人	ベスト8 大羽・高橋
ラグビー		ベスト8（冬季大会）
軟式庭球	女 団体	決勝トーナメント
	女 個人	ベスト16 田辺・山下

## 全医体成績

種目	成	績
バスケットボール	女	優勝
弓道	団体	4位
	個人	3位 森川（5年）
	個人	6位 北（4年）

# 第39回北海道地区 大学体育大会終る



第39回北海道地区大学体育大会は本学が当番校となり開催された。7月10日(金)の開会式には本学体育館において選手約250名が参列し、選手を代表して5年の大羽文博君が選手宣誓を行った。翌日の7月11日(土)より3日間に亘り48校から約5,000名の選手が参加し旭川市を主会場に熱戦を繰り広げた。

今大会は、男子バレーボール部が3位、女子バスケットボール部のベスト8、10年振りに出場した柔道部が決勝リーグへ進み総合で男子8位、女子9位の成績であった。

この体育大会の開催にあたり、関係クラブの学生諸君の綿密な準備や大会関係者の協力により全種目無事終了することができました。

今回の大会運営にあたり、ご協力ご支援をいただいた関係顧問教官、関係クラブの学生、並びに大会役員に対



し紙面を借りて、厚くお礼申し上げます。

(学生課)

種目	順位		優勝	準優勝	第3位	旭医大
	陸上競技	男		学院大	北海学園	旭教大
女			道女短	札教大	岩教大	
硬式野球			北海学園	釧公大	樽商大 学院大	1回戦
準硬式野球			釧教大	北大	東日本大 学院大	1回戦
ソフトテニス	男		学院大	道工大	樽商大 帯畜大	1回戦
	女		道女短	静修短大	東日本大 樽女短	1回戦
バスケットボール	男		道都大	北海学園	釧教大 帯畜大	2回戦
	女		道女短	静修短大	札教大 旭教大	2回戦
バレーボール	男		帯畜大	学院大	旭医大 北星学園	3位
	女		旭教大	道薬大	帯畜大 静修短大	予選リーグ
サッカー			岩教大 樽商大		酪農学園 専修短大	1回戦
卓球	男		道工大	学院大	北海学園 道都短大	予選リーグ
	女		道女短	栄養短大	北大 岩教大	予選リーグ
バドミントン	男		学院大	室工大	道工大	1回戦
	女		道女短	静修短大	北星学園	1回戦
柔道			道都大	道都短大	学院大 東日本大	ベスト8
剣道	男		学院大	樽商大	札教大 学園北見	予選リーグ
	女		駒苫短大	帯畜大	道女短 静修短大	予選リーグ
弓道	男		樽商大	北海学園	室工大	
	女		北大	樽商大	学院大	
ハンドボール			道都大	北海学園	函教大	1回戦
総合	男		学院大	樽商大	北海学園	8位
	女		道女短	静修短大	札教大	9位

## 課外活動短信

### 硬式庭球部男子創部以来初“1部昇格”

今年6月より行われていた道リーグ王座決定戦におきまして、旭川医科大学男子硬式庭球部は2部で1位に輝き1部との入れ替え戦に進み、8月5日に酪農学園大学と対戦しました。

結果は5対1(残り3試合は棄権)と戦前の予想を上回る大差で、創部以来初の1部リーグ昇格を果たすことができました。

来年1部でのリーグ戦でさらに良い成績を残せる様クラブ員皆日々練習にはげんでおります。

(文責 5年 小久保 拓)

# 第18回医大祭終る

## テーマ 「一刻千金」

第18回医大祭は6月5日(金)から6月7日(日)までの3日間開催されました。

昨年まで4日間あった開催期間は今年から3日間となり、さらに開催時期も1週間早まり、盛上りに欠けることを懸念していたが、実行委員会を中心に各クラブ、一般学生等が丸となり努力した結果、どの企画も盛況のうちに無事終了し、まさに今年のテーマどおりであった。

なお、催物は「山下洋輔・渡辺香津美コンサート」・「小林完吾講演会」のほか、クラブ・サークル企画展及び模擬店等もり沢山であった。(学生課)



## 原稿を前にして

第18回大祭実行委員会委員長 菅 敏郎

今日は7月23日。自分の部屋の片付けをしていたらゴミのようになった書類の中からこの「かぐらおか」の原稿依頼書が出てきた。「うわっ！ やばい！ これから実家に帰らなくちゃいけない、てのに…。しかし書かなくては！ でもどういう内容にしようか。ゴーストライターを誰かにまたやってもらおうか。いやダメだ、そんなことは、でもやっぱ面倒臭いなあ。しかしやっぱ自分で書かなきゃ、そうだよ、こんなの適当に書きゃいいんだよ、適当に。でもこれ皆が見るんだよなあ。『こいつ文章ヘタクソだなあ』とか思われたらイヤだな。やっぱ



ちよっとは考えてから書こう。うゝん。しかし、この曲はいいなあ。(この時BGMがウィングダムヒルだった)いかゝん!! この原稿に集中しなくては。その前にちよっと一服しよう。シュボッ。(タバコに火をつけた)フゝゝ。しかし…、こんなことでよくあの学祭委員長できたなあ。そうだよな。まわりにはすごい奴らがいっぱいたからなあ。金を扱わせたら右に出る者なしと自ら言っていた花田。物品処理の鬼と自称していた生田、広告取りの鬼、秋野。特攻野郎、橋本。チェックマン、吉田。マシーン横浜。ぬ〇が〇野郎、斉藤。坂中央大先生。演歌を唱えば医大No.1の伊藤。そして、6年の井上さん(スーパーバイザー兼…………)。口の減らない樋口。いつも黄色い声の中村。いつもどっしり構えている春山。黒い好青年、丸山。来年の企画の長、市川。いづれ委員長になる山本。パワフル西村…………。皆がいたからこれだけすごい学祭ができたんだよなあ。実行委員じゃなくてもすっごく協力的な人もいっぱいいたし…。とにかく、本当に有能な人間に恵まれて幸運この上なかつたって感じだなあ。まあ確かに学祭準備期間の何ヶ月かは皆ビリビリしていてよく衝突があった。だけど、それだけ皆真面目にやっていたわけだし、今となっては笑い話だ。でもやっぱりもっと実行委員欲しかったなあ。人数がいればいる程、大きいことができるし、仕事も細分されて楽になるからなあ。やってみればすごく面白いのに……。ところで来年はどうなるんだろ？ きっと後輩達が頑張ってくれると信じることにしよう。」

ふと気付くともう原稿が仕上がりがつつあった。「こ、これは!! ……ラッキー。」

最後に第18回医大祭を大成功させるために協力して下さった方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。





# 留学生寄稿

—旭川医大に向往して—

姜 波 健

私は、1990年1月に日本文部省国費研究留学生として旭川医大に到着しました。私は、日本に留学する前に日本語を習ったことがなかったので、国の知合いの人々は、何故私が日本の旭川医科大学に行きたいという希望を持っているのかという質問をよく受けました。これに関しては後述述べたいと思います。

私は中国の上海の出身です。上海は人口一千万以上の大都市で、文化、工業、商業の中心地として知られています。私の母校は上海第二医科大学で、フランス、アメリカの教会が母体となって創設された大学です。現在では基礎医学院と口腔医学院及び5つの附属病院と10の研究所（心臓、内分泌、免疫、整形外科などを専門分野とする）から成り立っています。私は、1983年にこの大学の医学部を卒業し86年同大学の大学院入学、89年に医学修士の学位を受けました。大学院時代に同種における組織・細胞移植（allogenic transplantation）に非常に興味を持っておりました。移植に関する主幹雑誌である《Transplantation》を読み、旭川医大第二外科において水戸迪郎教授をはじめ研究者達が“肝細胞の脾内移植”についての色々な研究を世界のトップレベルで行なっていることを知りました。このことが、私が日本の旭川医大に留学したいという希望を持ち続けた理由です。

到着した1月末の旭川は、外は雪と氷と風以外はなにもないという印象でした。まだ寒さにも慣れておらずさらに言葉もあまり通じない状態で、いくら寂しくて早めに帰りたいと時々夢に見ておりました。このように気持ちの落ち込んだ時もありましたが、水戸教授はよく気遣って下さり、何か困ったことがあると葛西助教授、草野講師、山本講師、棟方講師などにわざわざ頼んで下さいました。特に仕事の面では実験の計画を立てるとか、実験動物の選択をすとかという場合に、英語に通じる先生一人を付き合わせるようにうまく配慮して下さいました。また医局の若い先生達や、事務の人達にも生活上の色々な面で大変お世話になりました。

昨年8月に水戸教授が附属病院長に就任されてからは大変御多忙になり、私とゆっくり話す時間もなかなか取れないにも関わらず、実験の助言や新しい発想など誠に熱心な指導をして下さいました。おかげさまで一年後には“肝細胞の脾内移植”という研究に関する多くの知識を

得ることができました。仕事以外の面では、日本の“忘年会”が深く印象に残りました。日本人は年末になるとこの一年の色々なことを考えながらお酒を飲み語り合いながら新しい年を迎える準備をするということを知りました。中国では昔からこのような習慣はなかったので非常に印象的でした。第二外科の忘年会で暖かい歓迎と仕事に対する激励を受け、大変感激いたしました。

旭川到着以来本年4月までの1年3カ月で旭川の長い冬と春、短い夏と秋を経験したのみでなく、有意義な研究生活を送らせて頂きました。さらに4月9日には皆様のおかげで大学院に入学することができ、これから4年間旭川医大で研究を続けることができるようになりました。先日、夏のある夕方大学構内を歩きながらふと回りを見渡すと、緑が一杯で花も生き生きと咲き誇っており、旭川に到着した頃の厳しい冬の寒さと憂鬱が嘘のように感じました。これからも私達の肝細胞移植における新しい研究成果を残すために懸命に歩き続けようと考えています。

生年月日	1958. 2. 8
国籍・出身地	中国・上海
所 属	第二外科
在籍予定期間	1991年1月—1996年3月
趣 味	水泳、サッカー
留学前の最終学歴	医学修士
最終職歴	上海第二医科大学附属病院外科



## 研究室紹介

■ 産婦人科学講座 ■ 千石 一雄

産婦人科学教室は昭和49年清水哲也教授のもとに開設され、診療科としても昭和51年附属病院の開院と同時に診療を開始した。昨年7月、清水教授が本学学長に就任し、本年5月より石川睦男教授のもと18名のスタッフが大学における研究、診療に従事している。開設以来17年を経て、医局員数も50数名に達し、全道13の関連病院で後輩の指導また研修に専念している。現在、教室の診療、研究体制は「周産期」「婦人科腫瘍学」「生殖医学」の3部門から構成されており、周産期グループは笠茂、佐々木、西野助手を中心に本教室の最も得意とする分野の一つである超音波診断、ME機器を駆使し、胎児異常の出生前診断及び胎児治療に取り組んでいる。さらに羊水、絨毛採取による細胞遺伝学的検討も推し進められている。婦人科腫瘍グループは婦人科悪性腫瘍の診断、治療をメインテーマとし、齊藤講師、早川、内潟助手を中心に集学的治療を目指した診療が行なわれている。特筆すべきは、卵巣癌に関して、石川教授を中心として研究を進めているSOD (superoxide dismutase) が新しい腫瘍マーカーとして国際的に高い評価を受けており、また超音

波パルスドプラを応用した早期発見の検討が進められている。さらに、柳沼らにより癌抑制遺伝子の解析による発癌機構の解明に関し分子生物学的手法を用いた研究も展開されている。生殖医学グループは数年来、難治性不妊に対する治療として体外受精を導入し、その優れた臨床成績が国内外より注目されている。また男性不妊治療としてマイクロマニピュレーションを用いた顕微受精、卵子、胚の凍結保存の臨床応用も推進されつつある。研究面では、卵子の細胞遺伝学的正常性に関し本学生物学教室と共同研究を行なうと共に千石助教授、玉手助手らは排卵機構の解明、精子受精能に関する基礎的研究に取り組んでいる。教室の国際交流も活発で、現在までに中国、ブルガリアより4名の留学生を受け入れており、今秋にはペルーから研究員を迎える予定である。一方教室の留学経験者も現在 NIH に在籍している藤井を含め15名を数え、国際的レベルの診療、研究を目指している。今後、関連病院の増加が予想され診療体制の充実、さらに新しい分野への研究の着手など数多くのマンパワーを要するため、多くの卒業生を迎え教室がさらに発展することが期待される。

(産婦人科学講座 助教授)

## 研究室紹介

■ 歴史 ■ 原田 一典

当研究室が建造物として新営されて使用の開始をみたのは1974年の5月で、爾來この住人は一度も変らずわたしです。20年にもなるとすると、椅子の人工皮革はほころび、日除けのよれも外光を十分遮蔽することを拒むようになり、したがってその住人も老いさらばえつつあることは否めません。「気力も薄れてきたなあ」とつぶやいたところ、「いやいや、老いてますます」とおっしゃるので「**壮**」とて慰めてくれるかと思いきや、「頑固だ!!」と、昨日、東副学長より御託宣を受けました。いずれにしろ老いの表われでしょう。

たしかに頭・眼・耳・歯に云々と、肉体的状態は如何とも為し難いものですが、ただ歴史の研究という仕事に対しては、心労ながらも、いよいよ面白さが加わってきました。面白さといっても大それたことではありません。人間とか、それが構成する社会とか、またそれらの営為である諸事象を対象に、その存在の意義や価値を求める歴史研究において、可能な限り多くの立場や視角を駆使して解析し、組立てていく面白さです。このような事は本来学問研究上わかりきったことなのですが、それにしても今までは、為さねばならない、という意識に駆り立てられて、原理・原則を設定するに単純で、そこからの論理の展開は性急であったという反省をいただきます。歴

史学が、自由の意志を有する人間、換言すれば不確定要素に満ち満ちた人間の行為を対象とする以上、より広くさらに深い洞察が不可欠でありましょう。そんな事が再確認されてきて、面白くなってきた、ということにして、恥しながら今に至ってちょっぴり大人になったか、という実感です。

わたしの研究は、北海道地域史に終始しています。特に明治維新以降、国家的政策の下に開始された北海道の開発事業の意図と実態を解明し、それが近代日本の発展史上にどのような機能と成果をもたらしたのか、ということの基本テーマとしています。この研究過程で、18年間を費やした『新北海道史』(全9巻)、その後『新札幌市史』(既刊4巻)の編纂事業に参画し、そして現在、今後10数年を予定する『新旭川市史』(全8巻)の編纂に従事しつつあります。これら一連の仕事はわたしの基本テーマと深くかかわっているのですが、テーマ自体の研究の完成は先へ先へと延ばされつつありますので、取り敢えず中間的まとめを、この2・3年中に一書としておきたいと考えています。

本性いたって物臭ながら、物好きな面もあり、物のはずみで興味も加わり、この数年きわめて充実、という手前勝手な感懐を盾にさらに鞭打って、社にして頑なに、それなりの仕事に励んでいます。

(歴史 教授)

## 卒業生の動向

去る3月25日(水)に本学を卒業した113名の勤務(連絡)先は次のとおりです。

また、4月に行われた第86回医師国家試験には本学卒業生129名が受験し、116名(平成3年度卒業生104名)が合格しました。

(学生課)

## 平成4年度 後期分授業料免除 及び延納・分納について

平成4年度後期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り、平成4年9月1日(火)～9月21日(月)までに申請してください。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

### 1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合  
 なお、平成4年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない(休学の理由による者を除く。)
- (2) 授業料納期前6月以内(新入生については、入学前1年以内)において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。)が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める理由がある場合

### 2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書
- (3) 災害を受けた場合は罹災証明書(市区町村、警察、消防署が発行したもの。)
- (4) 市区町村発行の所得証明書(給与所得者については、平成3年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成3年分の確定申告書(一面・二面)等の写し(生計を一にする家族全員分)を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。)
- (5) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (6) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者(申請者本人及び義務教育の就学者は除く。)の在学証明書
- (8) 自動車保有に関する申立書
- (9) その他家庭事情により参考となる証明書等



## 平成4年度 日本育英会奨学生の 募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、9月1日より公用掲示板に掲示しておりますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

## 学生教育研究災害傷害保険の 加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生は、加入するようになしてください。

記

1. 受付期間 自平成4年10月1日(木)  
至平成4年10月30日(金)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料
 

6年間	3,400円
5年間	2,950円
4年間	2,450円
3年間	1,900円
2年間	1,300円
1年間	750円
4. 支払い保険金の種類と金額

区 分 種 類	正 課 中	学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中(学校施設外の課外活動については、大学に届出た活動に限る。)
	学校行事中	
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数4日以上が対象 6千円～30万円	実治療日数14日以上が対象 3万円～30万円
入院加算金	1日につき4,000円	1日につき4,000円

## 土曜日の業務について(学生課)

前期に引き続き、後期についても2名の職員が執務を行います。各種手続きなどは平日に願います。

なお、冬季休業中(12/21~1/16)及び春季休業中(3/15~3/31)は、執務を行いません。

## 表紙写真の説明

### パルスフーリエ変換NMR装置

超伝導磁石(6.3T)を用いて高分解能NMRスペクトルを得る装置で、主に生体内のリン代謝の研究に有用なリン化合物(ATPや無機リンなど)を灌流臓器(心臓、肝臓など)や小動物(ラットなど)臓器の体表から直接測定し、非破壊的かつ連続的な変化を観察できる。

## 教官の異動

### ※昇任

4.5.16付 産婦人科学講座 教授 石川 睦 男

4.5.16付 生 物 学 教授 上 口 勇次郎

4.6.1付 病 理 部 助教授 三代川 齊 之

4.7.1付 産婦人科学講座 助教授 千 石 一 雄

4.7.1付 生 物 学 講 師 立 野 裕 幸

4.7.16付 眼 科 学 講 座 教 授 吉 田 晃 敏

### ※採用

4.8.1付 臨床検査医学講座 教授 池 田 久 實

4.8.16付 内科学第一講座 教授 菊 池 健次郎

### ※辞職

4.7.31付 耳鼻咽喉科学講座 助教授 白 戸 勝



# 外 窓

高草木 薫

### 夏の終わりを感ずる頃

今年の春から初夏にかけて北海道特有のさわやかな快晴の日がやけに少なく、本州の梅雨時の様なじめじめした天気の日が続いた。あっと言う間に暑い日光が射してきたかと思うと、盆踊りの矢倉を吹き抜ける風は微かに涼しい。確かにこの時期、日々日没の時間が早くなり、もう夏も終わったなという寂しさが漂う。学生の頃、夏の終わりを実感したのは、いつも東医体でバレーボールの試合が終わった時だった。特に最後の東医体では、旭川医大バレー部は4年連続優勝の群馬大学を予選で破り、準決勝で信州大学に予期もしない不覚の一負を喫したものの3位を死守した。試合が終わったあと、“これでバレーボールは終わったな”という思いと、肩と腰そして左足関節の痛みが残った。東京から旭川に帰って来ると、空気の軽さに加え風通しの良さ、涼しさは夏が終わったことを教えてくれた。入学当時、先輩に乗せられ、“医者とは体力だ。経験、知識、実力の無いおまえ達に要求されるものは君達しか持ち得ないその未知の体力と情熱である。”という主旨の物凄い激励(?)を受けて入部したバレー部ではあったが、あっと言う間に6年が過ぎていた。当時、確かに体力は人一倍ついたと思ったが、左足関節、膝関節の故障、腰痛、右肩の故障、フラインググレイプのおかげでできてしまった前歯のひびきなどバレーボールはその代わり、余りに多くの傷跡を残してくれた。この諸関節の痛みは気温が高いと和らいでくれるが、これから秋に向い、気温が低くなるにつれてじわじわと痛くなって来る。最近、夏の終わりの寂しさは肌で感じるよりはむしろ身体全体で痛いほど感じるのである。

今年のパルセロナオリンピックでは男子バレーボール

チームは6位、女子は5位であった。女子はメダルが取れると私も思っていたが、ブラジルに思わぬ苦敗を喫してしまった。個人的に応援していた中田久美選手が泣きじゃくっていたが、メダルを取らせてあげたかと思うのは私だけだろうか?とにかく彼らの夏は終わった様な気がする。ところでオリンピックとバレーボールといえば、忘れられないのが今から20年前のミュンヘンオリンピックで松平監督率いる日本男子チームが準決勝で軌跡的な逆転勝利を納めてついに優勝したことである。このオリンピックでは、松平監督らが考案した“時間差攻撃”(一種の“おとり”攻撃)が大きな武器になった。この攻撃、決めた方は正に快感であるが、決められた方は、相手に翻弄されたような実に嫌な気分になる。一種の“騙し打ち”のようなプレイにも思えるが、戦略的には実に頭脳的であり、身長で世界に劣る日本選手が優勝するためにはこの様な“新しい発想”が必要であった。ただバレーボール界で一大センセーションを巻き起こしたこの攻撃方も、考案してから完成するまでに約3年の時間が必要であったということであり、日本チームはメキシコからミュンヘンまでの4年の“時間差”を実に有効に使ったことになる。しかし、この時間差攻撃のおかげだけで優勝できたわけではなかったようです。今は亡き猫田選手(セッター)によれば、“どの国の選手もしている練習量を遥かに越える練習量に加えて、次々と考案されてゆく新しいコンビネーションプレイを確実にマスターするだけの鍛錬と信念が選手の自信を支えた”とのことである。やはり努力の賜である。

最近つくづく思うのがこの“時間差”の重要性と“新たな発想”への挑戦である。現在の努力が稔る可能性があれば、それは3年以上先になるのかも知れない。じっくりと腰を据えて自らの課題に取り組むことが重要である。Pasteurの言葉に“Chance favors the prepared mind.”というのがあります。この言葉“こしたんたんとチャンスを狙え”というよりはむしろ、“地道な努力の積み重ねをする君にはきっと良いチャンスがやってくるよ”という科学者への道しるべなのかも知れない。

(生理学第二講座 講師)